

(独立行政法人教員研修センター委嘱事業)

教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

(平成18・19年度10年経験者研修)

報 告 書

プログラム名	成長しつづける教師のための10年経験者研修
プログラムの特徴	<p>本学は「成長しつづける教師のための10年経験者研修」をテーマに掲げ、個々の受講者に応じた知識、技術等を身につけるため、次の3つの視点に基づく研修を行ってきた。</p> <ul style="list-style-type: none">○ 受講生の内省・省察に基づく自己評価方法○ 自己学習と受講者相互の啓発活動を取り入れた大学における専門講座プログラムの開設○ 受講者の在籍校における校内研修プログラムの開発等 <p>本報告書は、これまで北海道教育委員会と連携し進めてきた10年経験者研修モデルカリキュラムプログラム開発の成果の概要をまとめたものである。</p>

平成20年3月

北海道教育大学 北海道教育委員会

I 開発の目的・方法・組織

1 教員研修モデルカリキュラムの目的

このプログラムは、「成長しつづける教師のための10年経験者研修」をテーマに、本学が北海道教育委員会との相互協力協定に基づく円滑な連携により実施している、10年経験者研修専門講座を基に開発した教員研修モデルカリキュラムを提示することにより、全国の教育委員会が実施する研修の充実に資することを目的とする。

2 教員研修モデルカリキュラムの開発の方法

(1) カリキュラム開発の実施体制等 (図1参照)

① 10年経験者研修専門講座における北海道教育委員会との連携

教員研修モデルカリキュラムの開発は、北海道教育委員会との相互協力協定により実施している、10年経験者研修専門講座を基盤としている。

当該経験者研修は、北海道教育委員会からの業務委託によって実施されており、北海道教育委員会が主催する10年経験者研修専門講座の校外研修に位置付けられる「教科指導等研修(5日間)」及び「生徒指導等研修(3日間)」から構成され、本学において全面实施している。

なお、実施初年度である平成16年度は、札幌校、岩見沢校の2キャンパスで試行的に行い、平成17年度からは、全キャンパス(札幌、函館、旭川、釧路、岩見沢)で実施されている。**年間を通じて、教科指導等研修を約110講座、生徒指導等研修を約30講座開講し、それぞれ、教科指導等研修約800名、生徒指導等研修約320名の現職教員を受け入れている。**

② モデルカリキュラム開発に至る経緯

本学では、北海道教育委員会からの業務委託により実施してきた10年経験者専門講座の成果を踏まえ、北海道教育委員会の中で、受講者の校外研修として位置付けられている当該研修だけではなく、事前評価、研修計画の立案から校内研修まで、10年経験者研修全体にどのように関わっていけるのかを検討した。

このモデルカリキュラム開発は、3点の柱の具体化に向けて取り組んだものである。

1点目：受講者の内省・省察に基づく自己評価(事前評価)方法の開発

2点目：自己学習と受講者相互の啓発活動を取り入れた「校外研修」(専門講座プログラム)の開発

3点目：10年経験者研修専門講座と連携した「校内研修」プログラムの開発

③ 開発に向けた体制

本プログラムの実施にあたっては、本学と北海道教育委員会の緊密な連携の下に設置した10年経験者研修専門講座運営委員会(以下「運営委員会」という。)の中に、モデルカリキュラム作成専門部会(以下「専門部会」という。)を設置して取り組んだ。

専門部会においては、モデルカリキュラムを作成するのではなく、運営委員会と連携し、

10年経験者研修における自己評価及びその改善についても検討してきた。

さらに、北海道教育委員会、市町村教育委員会及び各学校長で構成される10年経験者研修実施協議会（以下「協議会」という。）に参画し、北海道教育委員会が実施する10年経験者研修全体に関わるとともに、協議会に対して、開発したモデルカリキュラムの検証を依頼した。

（2）開発の視点（図2参照）

本プログラムでは、図2のA～Eの研修計画・過程と10年経験者研修専門講座におけるこれまでの実績・成果を踏まえ、成長しつづける教師のための「内容的側面」と「方法的側面」からのモデルカリキュラムの開発を行った。

① 内容的側面

教師としての基礎的資質や対象知識（児童・生徒、授業内容である教材と授業方法・技術等とその背景となる社会や科学等の進展を踏まえた専門的・学問的知識）と臨床的実践力などの基礎知識（対象知識を操作し、教育実践を展開、改善・充実するための知識）を併せて実践し、その内省・省察の方法を開発する。

② 方法的側面

受講者の課題意識や主体性を尊重し、内省・省察に基づく課題に焦点を当てた専門講座事前アンケートを実施し、自己学習と受講者の活動による相互啓発を取り入れた学習・研修方法を開発する。

このモデルカリキュラムの開発は、「A・評価、B・研修計画の立案」、「C・校外研修」、「D・校内研修」の各サブプログラムの開発と併せて、これらの有機的な統合・連携を図ることを視点とする。

（3）モデルカリキュラムの具体的内容（図2参照）

本学における教員研修モデルカリキュラム開発の取り組みは、（1）の②で説明したとおり、3点を柱としている。

以下、それぞれの具体的内容について記す。

A) 受講者の内省・省察に基づく自己評価（事前評価）方法の開発

「評価、研修計画の立案」プログラム開発

これまで、「A・評価、B・研修計画」においては、校長（他者評価）と受講者（自己評価）双方が、受講者の教育実践に関する活動の成果を特徴、価値付け等を分析的・横断的に捉えて判断するため、次の観点別評価を実施している。

- (a) 校長による他者評価の項目：①学習指導等（17項目）
- ②生徒指導等（10項目）
- ③学級経営等（12項目）

- (b) 受講者による自己評価：
- ④その他
 - ①学習指導等（19項目）
 - ②生徒指導等（9項目）
 - ③学級経営等（12項目）
 - ④その他（教育活動における成果と課題）

さらに、平成19年度は、プログラム開発の日程に従い、受講者の内省・省察に基づく課題を明らかにするため、「教育実践改善チェックリスト」（教員養成推進プロジェクト作成）を参考にして、適切な研修計画に繋がる自己評価について見直しを図り、専門講座事前アンケートの試案を作成した。

B) 自己学習と受講者相互の啓発活動を取り入れた「校外研修」プログラムの開発

校外研修（16日間）のうち「教科指導等研修（5日）」と「生徒指導等研修（3日）」は、本学において実施している。

この校外研修では、教師としての専門性を高めるための教育学、心理学、教科教育科目、さらに教科の背景にある教科専門科目等の学問的・専門的知識、技能等に焦点を当てるだけではなく、それらの教育・教育実践、教科専門等に関する知識と関連させ、具体的な実践場面を想定した演習や、教育実践の観察・記録を基にした教育実践に関する協議などを実施する。

具体的には、**教科指導等研修においては、指導力の向上を図る大学院レベルの内容とすること、生徒指導等研修においては、児童生徒の個性の伸長を図り、社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来における自己実現の形成に向け児童生徒の主体性・独自性を尊重し、自己教育力を育成し、共感的人間関係を構築し、学習障害等を克服することを対象**とした。

また、国際化、情報化、福祉、学習意欲・学力低下、不登校、いじめ、特別支援教育等の今日的課題に焦点を当てた研修内容への拡充を行った。

このため、この研修では小集団によるゼミ方式をとり、グループワーク、チームワーク能力の向上を図りつつ、教科指導、生徒指導等の教育実践に関するケーススタディを重視し、教科専門、教育実践等に関する知識等を教育臨床・実践の文脈で利用し、校内研修と連携するプログラム開発を行った。また、実技を伴う教科や生徒指導については、理論と実践の両面の指導力向上を図るプログラムとするよう工夫した。

以上、大学における専門講座の研修を通して、小中学校における教育実践を基幹とした専門性と実践力に焦点を当て、校内研修プログラムとの関係を図る「10年経験者研修ハンドブック」として取りまとめ、20年度からの研修に活用する予定である。

C) 10年経験者研修専門講座と連携した「校内研修」プログラムの開発

学校における校内研修（授業研修・教材研究・授業設計等）は、それぞれの学校の校長をはじめとした構成員の特性や地域・風土・伝統などを尊重して行っている。

北海道の小中学校においては、半数以上の学校が、へき地・小規模、複式・複数教科担当であり、さらに、広域のため、日常的に研修に参加することが困難である。これに加え、10年

経験者研修の該当教員が所属校のリーダーになるなど、校外研修を含む10年経験者研修は、学校現場における校内研修との関連性が極めて強い。

以上のことから、受講者の所属する学校の現状を調査し、10年経験者研修専門講座の受講者の力量形成、資質能力向上を図るとともに、各所属学校の教育活動の活性化にも寄与する校内研修プログラムを開発した。

3 教員研修モデルカリキュラムの開発組織

(1) 具体的な開発の組織

① 本プログラムの開発の体制

本プログラムを開発するに当たり、次の組織を立ち上げた。

10年経験者研修モデルカリキュラム開発プログラム プロジェクトチーム	
北海道教育大学（5名）	北海道教育委員会（2名）
担当理事 1名	北海道教育庁
10年経験者研修専門講座運営委員会委員 4名	学校教育局義務教育課 2名

② モデルカリキュラム開発に当たっての教育委員会との協力体制

引き続き、モデルカリキュラムの開発にあたっては、10年経験者研修専門講座運営委員会の中に、モデルカリキュラム作成専門部会を設置した。

専門部会の構成員には、専門的知識及び豊富な経験が必要とされるため、北海道教育委員会からは、10年経験者研修全般並びに学習指導要領等に精通している主幹及び指導主事を、本学からは、運営委員会の構成員で、すでに実施している校外研修の企画・運営などを担当している教員や、学校現場における教職経験を持つ教員などを中心に組織した。

(2) モデルカリキュラム開発後の協力体制

現在、北海道教育委員会において、10年経験者研修全般にわたり、事業を円滑に実施することを目的とした10年経験者研修実施協議会を設置している。この協議会は、10年経験者研修のいわば外部評価機関として機能しているものであり、北海道教育庁生涯学習部、各校種の校長の代表、市町村教育委員会教育長の代表及び教育関係職員で組織している。

当協議会では、北海道内14教育局で実施する10年経験者研修における年間計画を作成し、実施上の諸課題についても協議を行っている。

本学は、10年経験者研修全般にモデルカリキュラムの実施を通して関わることになるため、平成18年度から参画して全道の教育現場の情報等を得ている。

これらのことにより、モデルカリキュラム作成専門部会において開発したカリキュラムの協議や実施後の評価を当協議会で行う。その結果を受けて、専門部会においてモデルカリキュラムの改善を行うとともに、運営委員会においては、受講者の在籍校を訪問し、専門講座において研修した内容を校内の研修等で環流している状況等、校内研修の充実の実態を聞き取り調査した。

図1 開発方法, 目的, 組織の概略

北海道の教員の資質向上

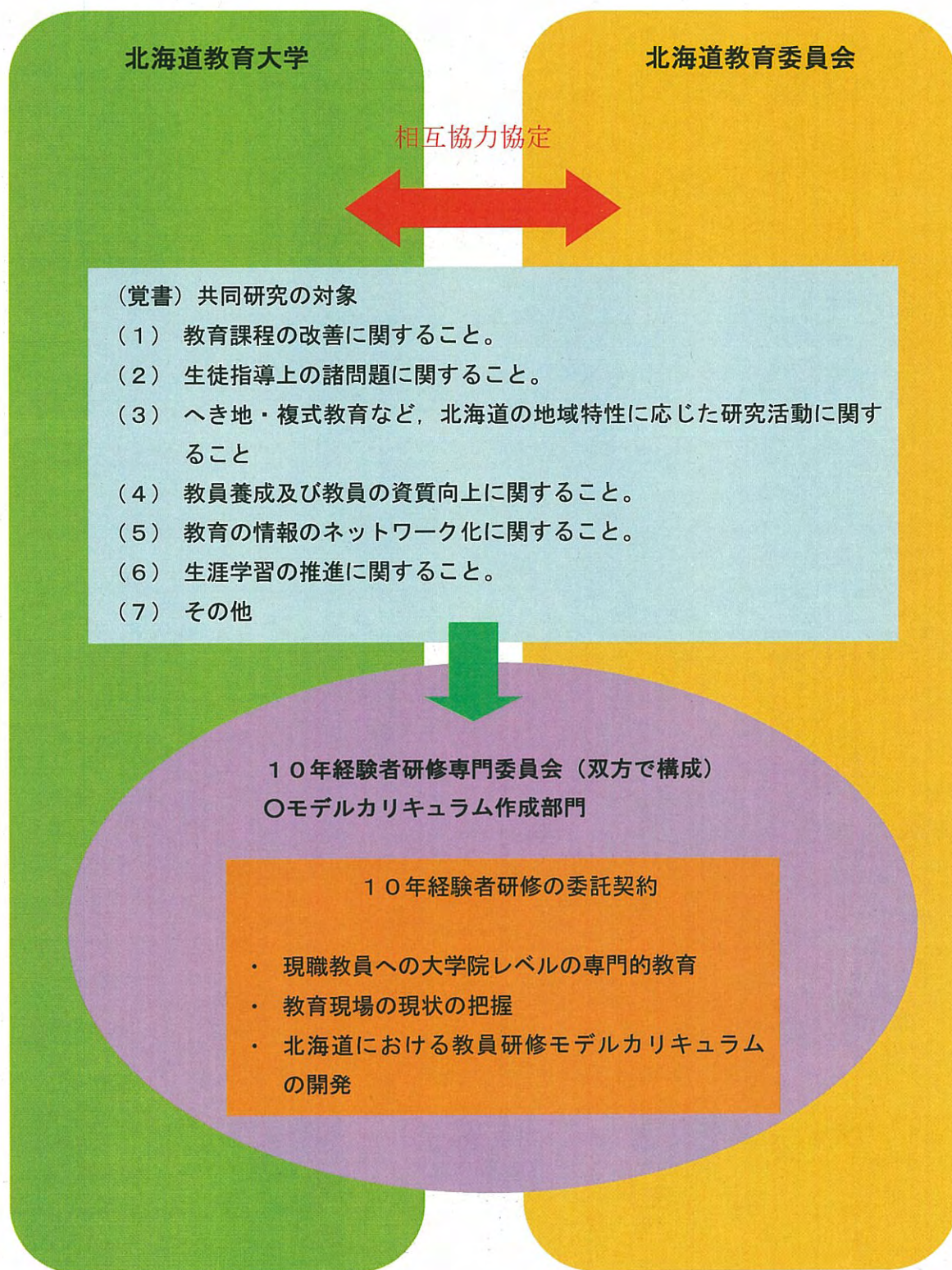
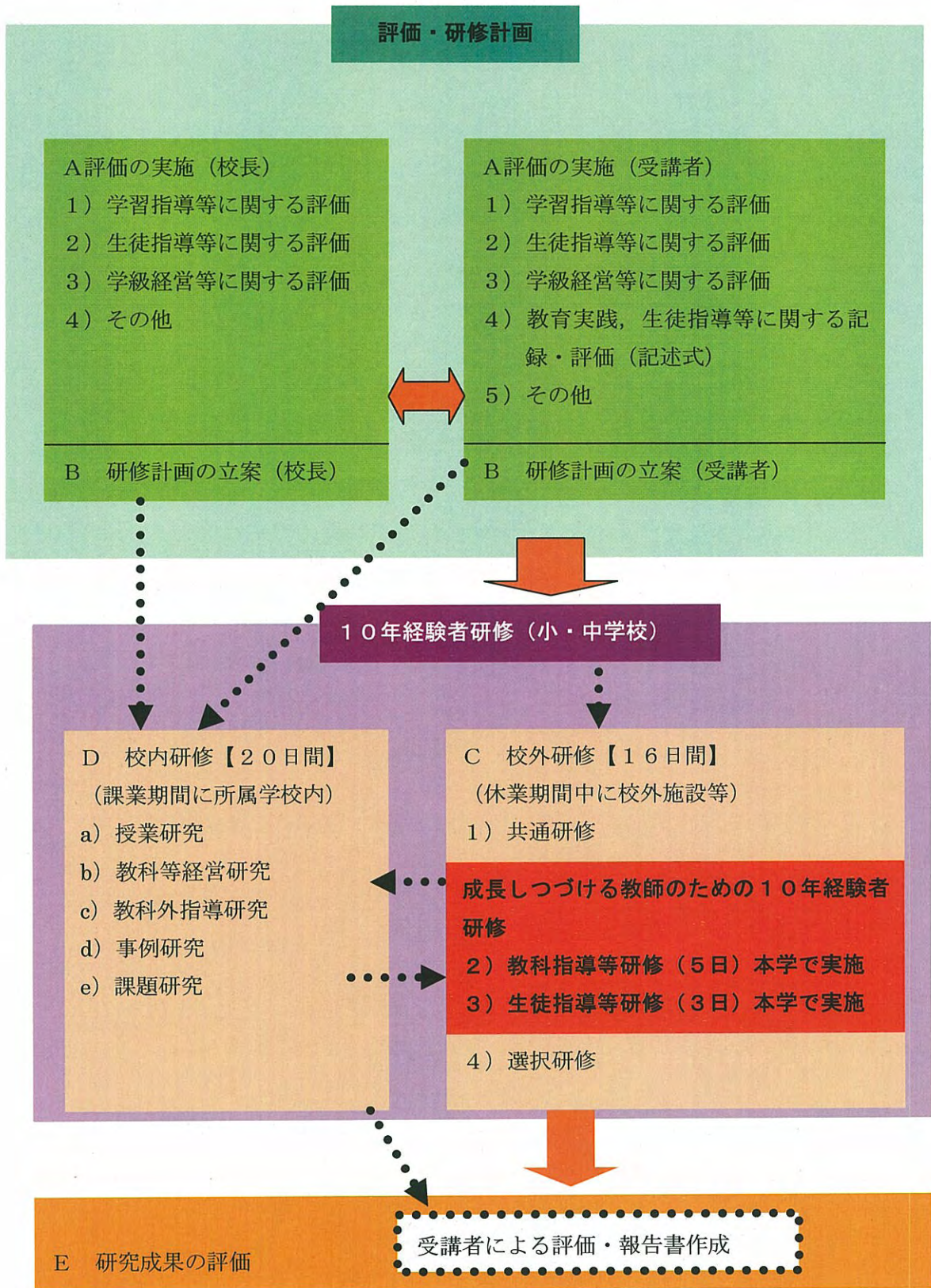


図2 北海道教育委員会における10年経験者研修の本学における専門研修の位置付け及び全体の実施内容・過程等



II 開発の実際とその成果

A 開発の視点1＝受講生の内省・省察に基づく自己評価方法の開発＝

1 研修の背景

教職10年経験者の一般的な実情

- ① 授業実践や生徒指導に体当たりで取り組み、学校教育の理解と技術を磨いてきた自分を振り返る時期
- ② 自分の方向性や実践と理論の本質や疑問点を実証的に究明する時期
- ③ 人間性や生き方のベースが色濃く出てくる段階
- ④ 学級・学年経営，教科指導，生徒指導等のあり方に関して広い視野に立った力量の向上が必要になる時期
- ⑤ 組織のリーダーとなり，学校運営上重要な役割を担ったり，若手教員への助言・援助など指導的役割が期待される段階

2 研修のねらいと内容

(1) 研修のねらい

- ① これまでの実践の振り返り
- ② 当面の問題，課題の解決
- ③ 成長しつづける教師として今後の実践の基盤を築く。

(2) 研修の内容

- ① 専門性を高める発展的な研修内容
- ② 教科の本質や今日的課題を踏まえた指導
- ③ 個々の教科指導の課題に応えるような研修



本研修：職務に関する知識や企画立案等の資質，能力を強化する絶好の機会

3 研修の方法

受講者が課題を設定の上，受講者間の議論や指導教員からの個別指導等を経て，課題研究結果の発表を行うなど，**少人数ゼミ形式による討論や発表等を中心**に行う。

◎ 受講生の問題意識，課題，ニーズの把握（図1参照）

例）教科指導，教材開発，生徒指導の発達理解，授業研究，学校経営，今日的課題への対応，多様な情報提供

◎ これらに対応した研修内容・方法の検討

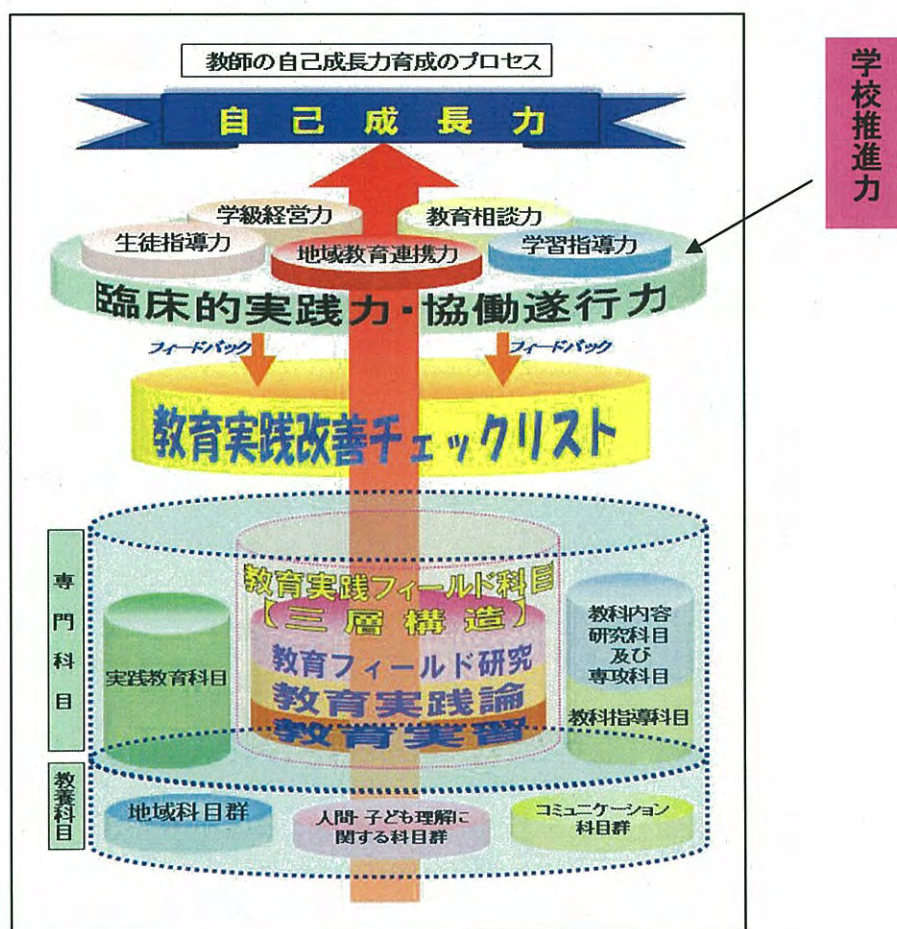
例) 教科の背景にある学問的・専門的知識，授業方法・技術の修得，知的刺激の提示

◎ 受講生が必要に応じ，大学図書館等の大学施設を活用して調査や教材作成等を行う。

◎ 本学附属学校等において教育活動にかかわる実践的な研修を行う。

図1 自己成長力を高めるチェックリスト (学部学生用)

本学では，学部学生に対し，いつの時代にも教師に求められる資質能力及び今後，特に求められる具体的能力などを踏まえるとともに，今日の学校現場や保護者からの声も加え，チェック項目の領域として次の7つの項目(学習指導力，生徒指導力，教育相談力，学級経営力，地域教育連携力，協働遂行力，臨床的実践力)を重視し，1年次から指導している。



10年経験者研修受講生に対しては，この7項目に，「学校推進力」を加えたアンケートを作成し，研修を受講する事前のニーズを把握して，実りある講座運営を目指した。(次ページ参照)

成長しつづける教師のための10年経験者研修アンケート 【自己内省、省察のための評価】

北海道教育大学専門講座を受講するに当たって、受講者自身がこの「研修を通して最も身に付けたいと考える視点」を、下記の右側の空欄に簡単な文章で書き入れてください。本アンケートは、本学が取り組んでいる教員研修モデルカリキュラムに関する研究の一環として実施するもので、今後、大学が開設している10年経験者研修専門講座の内容や方法の改善・充実に資するために行うものであり、他の目的に利用することはありません。なお、表中の「教員として身に付けたい力」欄は、本学の「大学、大学院における教員養成推進プログラム」の研究の中で作成した「教師の養成段階で身に付けるべき7つの基礎能力」を参考に、「学校推進力」を付け加えて、10年経験者に求められるであろう8つの力としていますが、これも試行中であり改善を重ねていく予定です。

<記入上のご注意>

1. 表中の「初年度～10年（実践・検証期）」欄は、あくまで参考としてください。
2. 表中の「初年度～10年（実践・検証期）」欄の8つの区分から複数選んで、記述しても構いません。
 なお、この区分以外に、独自の課題等をお持ちであれば、それも記述してください。

北海道教育大学10年経験者研修専門講座運営委員会
 教員研修モデルカリキュラム専門委員会

管内	コード番号		コース名	
	コード番号		コース名	

教員として身に付けたい力	初年度～10年（実践・検証期）	11年以降（充実・伸長期）
	教職10年間で身に付けておくことが望まれる力	成長しつづける教員として、研修を通して最も身に付けたいこと
学習指導力	<ul style="list-style-type: none"> ○教材観の確立 ○教材研究の深さ ○授業の構想力・授業技術 ○研究心や探求心 ○分析能力 ○授業構成力 ○話し方の技術 ○一人一人の子供の意欲を高める独自の手立て ○評価の仕方 ○楽しく分かりやすい授業とそれを行うための雰囲気づくり ○専門知識 ○教材教具の活用 ○教師自身の独自の指導法、工夫、柔軟性など 	
生徒指導力	<ul style="list-style-type: none"> ○一人一人の子供を理解する能力 ○発達の違いの理解 ○子供一人一人の生きがいがい、充実感、自己有用感を把握する力 ○善悪などの判断能力、状況認識能力 ○子供への論理的説得能力、問題に対する決断力 ○教師自身の興味、関心の広さなど 	
教育相談力	<ul style="list-style-type: none"> ○子供とのコミュニケーション能力、子供の話を聞く力 ○一人一人の子供を受容する力、共感的に理解する能力 ○自己の感情をコントロールする能力 ○温かみのある人格などの人間的魅力 ○問題行動等に素早く対応できる能力など 	
学級経営力	<ul style="list-style-type: none"> ○子供たちを把握し、まとめる力 ○環境を整える能力 ○学級という集団を向上させる能力 ○計画に基づいて推進していく力 ○学校の課題を学級経営と結び付けることのできる能力など 	
地域教育連携力	<ul style="list-style-type: none"> ○保護者との連携や情報発信能力、情報公開、透明性 ○情報収集、処理能力 ○保護者や地域の願い、要求を理解する力 ○地域生活や地域文化を理解する力 ○良好な人間関係や人脈を作ることができる能力 ○地域行事、活動に参加できる行動力、社会性 ○保護者への説得力・説明力 ○家庭の教育力を高める力など 	
協働遂行力	<ul style="list-style-type: none"> ○仲間との協調性、社会人としての感覚、常識、服装、言葉遣いなど社会性 ○コミュニケーション能力 ○教師間の関係調整能力、意見の交換や意志の疎通ができる能力 ○同僚や外の世界から学ぼうとする意欲や能力など 	
臨床的実践力	<ul style="list-style-type: none"> ○日常的な子供との関係づくり（遊びなどや精神的交流） ○特別支援教育についての知識や理解 ○自分の理念、信念を語ることのできる力 ○社会事象、周囲の世界への興味の高さと子供への指導 ○信頼を生む授業力 ○自らの子供観、学校観、教育観を持ち、それを語る力など 	
学校推進力	<ul style="list-style-type: none"> ○企画・立案能力 ○学年・分掌・行事等を企画し指導する力 ○新たな視点で提案する意欲や能力 ○校内研修など種々の研修への参加する意欲と学校の活性化への努力など 	

ご協力ありがとうございました。

10年経験者研修大学専門講座専門講座アンケート集計結果について (受講生の内省・省察に基づく自己評価)

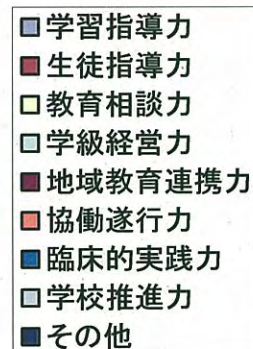
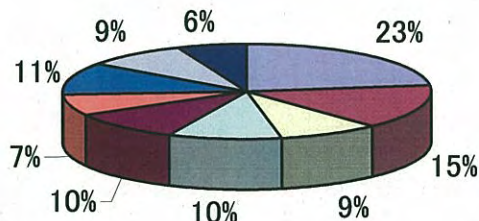
10年経験者研修大学専門講座事前アンケートの集計結果と、研修後の意見等について概略を記す。

◆事前アンケートによる「研修を通して最も身に付けたいこと」のニーズ把握

教科指導

項目	人数
学習指導力	184
生徒指導力	120
教育相談力	73
学級経営力	80
地域教育連携力	80
協働遂行力	56
臨床的実践力	88
学校推進力	72
その他	48
合計	801

教科指導

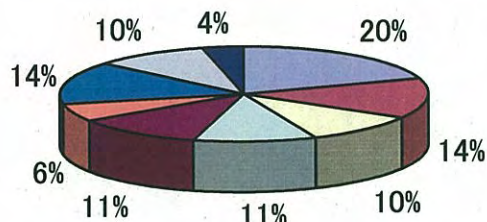


(複数回答)

生徒指導

項目	人数
学習指導力	64
生徒指導力	44
教育相談力	32
学級経営力	35
地域教育連携力	36
協働遂行力	20
臨床的実践力	46
学校推進力	32
その他	12
合計	321

生徒指導



(複数回答)

B 開発の視点2＝校外研修（専門講座）プログラムの開発＝

◆ 教科指導専門講座（考察）

1 事前アンケートで最も身につけたいこととして出された具体的項目

区 分	主 な 意 見	詳 細
学習指導力	○教材観の確立, 教材教具の活用 ○授業の構成力など ○専門知識	・実生活に反映でき意欲のもてるもの ・写真, 絵などの効果的な利用 ・地域教材の発掘 ・いのちの教育
生徒指導力	○子どもを理解する力 ○子どもへの論理的説得能力 ○生徒指導力・方法	・迅速・的確な理解 ・不登校・いじめ ・子どもの才能の伸ばし方
教育相談力	○子どもとのコミュニケーション能力 ○問題行動への迅速な対応	・目から心を感じ取る。 ・家族に問題がある場合の対応 ・多様な時代（高学年女子等）の理解 ・背中で生き方を示せる人間に
学級指導力	○環境を整える能力 ○学級という集団を向上させる力 ○学校の課題を学級経営に結びつけることのできる能力	・子どもに安心感を与える雰囲気 ・居場所のある学級づくり ・学級リーダーの育成 ・集団生活を逸脱する子どもへの対応 ・人間関係の活発化の手段
地域教育連携力	○保護者との連携・説明等 ○情報収集・処理能力	・保護者の多様化への対応 ・良好な人間関係 ・地域と子どもたちの関わり
協働遂行力	○教師間の関係調整能力	・円滑な人間関係の構築スキル
臨床的実践力	○日常的な子どもとの関係作り ○特別支援教育への対応	・保護者への説明・共通理解の方法 ・人間性の確立
学校推進力	○企画・立案能力 ○学年・行事等の企画及び指導 ○提案する能力	・実践・行動力 ・リーダー性の涵養 ・若手教員を引率する指導力 ・学校の教育目標の実現

2 事前アンケートの要望を受けて作成したプログラムの例

次項のとおり。

【国語科指導法 講座運営の概要】

◎講座担当教員 1名

◎受講生の課題の把握

- ・授業構想力を身につけたい。
- ・授業作りを学びたい。

◎受講生の留意事項、その他

- ・過去に作成した国語科学習指導案を持参する。

研修項目	時間数	目的	内容・形態・使用教材・進め方等
【第1日】 ○ガイダンス ○最近の国語教育の動向 ○外国の国語教育	6時間	○日程の確認 ○PISA型読解力を理解する ○文化審議会、中央教育審議会の答申を理解する。 ○フィンランドの国語教育を学ぶ。	・担当教員と受講生の自己紹介。日程の確認。 ・PISA調査(読解力)の公開問題例を紹介する。 ・文部科学省の『読解力向上に関する指導資料』を紹介する。 ・「これからの時代に求められる国語力」「国語科の現状と課題、改善の方向性」などを紹介する。 ・フィンランドの国語教科書を紹介し、受講生に日本の国語教科書と比較させる。
【第2日】 ○文学的な文章の指導	6時間	○文学的な文章の扱い方を学ぶ。	・先行研究(石山脩平・井関義久・鶴田清司・石原千秋など)を紹介する。 ・文学的な文章についての指導案をいくつか紹介し、全員で討議する。
【第3日】 ○説明的な文章の指導	6時間	○説明的な文章の扱い方を学ぶ。	・先行研究(大西忠治・森田信義・阿部昇など)を紹介する。 ・説明的文章についての指導案をいくつか紹介し、全員で討議する。
【第4日】 ○指導案の検討	6時間	○過去の授業を反省する。	・受講生が持参した指導案について、全員で討議する。
【第5日】 ○指導案の検討	6時間	○過去の授業を反省する。	・受講生が持参した指導案について、全員で討議する。

◎受講生の事後の評価

- ・先生にたくさんの資料を用意していただき、わかりやすく講義していただいたことに心から感謝します。
- ・今回の研修で学んだ多くのことを、今後、授業作りを生かしていきたい。
- ・講師のお話が面白く、もっともっと聞いていたかった。
- ・いろいろな管内の様子や同世代の先生方の実践を交流できてたいへん勉強になった。
- ・各自の指導案を検討し合うのはよい刺激となりました。

【数学教育講座運営の概要】

◎ 講座担当教員 4 名

◎ 受講生の課題の把握

- ・楽しいと感じられる授業の導入と学ぶ意欲を高める授業展開
- ・客観的な評価の在り方
- ・教師自身の独自の指導法

◎ 受講生への留意事項・その他

- ・授業改善コース：算数・数学教育の今日的課題を踏まえ、特に算数・数学の内容論から日々の授業を見直し、教材開発、問題提示の工夫などについて検討する。
- ・指導と評価コース：指導と評価の一体化を目指した算数・数学教育の在り方について協議し、指導の工夫や評価の仕方について具体例をもとに検討する。
- ・数学研究コース：小学校算数、中学校数学で学ぶ各領域の内容を概観し、いくつかの話題を取り上げ、より深い専門性に触れながらその数学的背景を探る。

研修項目	時間数	目的	内容・形態・使用教材・進め方等
<p>【第1日】</p> <p>①学習指導要領「算数・数学」の趣旨（講義）担当：相馬</p> <p>②数学教育の今日的課題（講義）担当：久保</p> <p>③コースごとの打ち合わせ</p>	6時間	<p>①学習指導要領についての理解を深める。</p> <p>②小中での指導の違いについて理解を深める。</p> <p>③コースごとに受講生の問題意識を高める。</p>	<p>①学習指導要領の「目標」の変遷、改訂の視点、要点、算数的活動、数学的活動という視点から、独自の資料を教材にして講義形式で研修が行われた。講義の形態ではあるが、受講生との討議を交えながら進められた。</p> <p>②算数・数学において育成する諸能力、算数・数学指導における小中の特性などについて、パワーポイントを用いた講義形式で研修が進められた。</p> <p>③コースごとに少人数の形態で議論がなされ、研修の課題が明確化された。</p>
<p>【第2～4日】</p> <p>コース別課題追究</p>	各6時間 (計18時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・小中それぞれの視点から指導案を改善する。 ・評価の検討から目標の重要性を理解する。 ・子どもをつまずきから数学の理解を深める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・午前中は講義、午後は小中混合のグループを作り、コミュニケーション、算数・数学の社会的有用性などの資料をもとに、指導案づくりがなされた。 ・必要に応じて講義を含めながら、教科書比較や模擬授業を通して、学習目標と指導との関係についてグループごとの少人数形態で討議が進められた。 ・中学校数学科の内容に焦点を当て、指導内容の背景にある数学について、受講生との個別指導形態で議論が進められた。
<p>【第5日】</p> <p>全体でのコース別の発表</p>	6時間	<ul style="list-style-type: none"> ・研修の成果を共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・午前中はコースごとに研修の成果がまとめられ、午後は全体場でこの成果が発表された。コースごとに発表資料が作られ、パワーポイントを用いてのプレゼンテーションとなった。

◎ 受講生の事後の評価

- ・最初から内容が決まっているのではなく、受講者の中での話し合いによって課題が見出されるという形で、現場に即した意義ある研修となった。
- ・講義だけでなく、多くの先生方との議論を深めながらの形態で楽しい充実した研修だった。
- ・学生などとの意見交換の場があってもよいと思う。

【 理科 講座運営の概要 】

◎ 講座担当教員 7名

◎ 受講生の課題の把握

・理科に関わる専門知識を深め、発問や授業の中で生かしたい。

・自身の実践を振り返り、適切に評価・判断し、さらに向上していく姿勢や能力を身につけたい。

◎ 受講生への留意事項・その他 野外活動を行いますので、野外活動にふさわしい服装の準備をお願いします。

*本講座では、共通コース(全員が一緒)とコース別(少人数指導)の2種類を設定した。

(■共通コース, ●コース別)

研修項目	時間数	目的	内容・形態・使用教材・進め方等				
【第1日】 1 講目ガイダンス 2 講目～4 講目 共通 教材	6 時間	共通：研修 の概要 共通：4 領域 の学習	■ガイダンス ■物理の教材[電池の性質] ■化学の教材[燃焼についての演示実験と考察の方法] ■生物の教材[生物を見る視点を学ぶ] ■地学の教材[天文の基本概念]				
【第2日】 1 講目～4 講目 コース別	6 時間	コース別：4 領域(各自 の希望によ る)	●物理 教材開発	●化学 教材開発 I	●化学 教材開発 II	●生物 教材開発	●地学 教材開発
【第3日】 1 講目～2 講目 コース別	3 時間						
3 講目～4 講目 共通 科学館	3 時間	科学館	■科学館における学習：①展示物の見学，②科学館の実験室で実験を行う，③プラネタリウム。				
【第4日】 1 講目 ～4 講目 共通 理科教育 I	6 時間	学習指導要 領/評価論	■形成的評価をとり入れた授業デザイン入門 講義と演習を交互に行った。また、話し合いを通してグループごとに授業のデザインを行い、演習ごとに発表・質疑、指導を行った。				
【第5日】 1 講目～3 講目 共通 理科教育 II	4.5 時間	体験的環 境教育	■学校教育における体験学習と環境教育 さまざまなパッケージプログラムを導入して、科学的な能力や技能を育成する活動などワークショップ形式で実施・講習した。				
4 講目 共通 まとめ	1.5 時間	まとめとアン ケート	■5 日間の学習を振り返ってまとめをした。 事後アンケートなど				

◎ 受講生の事後の評価

◆すぐに現場で役立つ内容で、大変勉強になりました。先生がたが熱心に指導してくださって改めて「理科って楽しいなあ」と思いました。準備など本当にありがとうございました。◆現場で実践できるような内容が多く、よかったと思います。先生がたのお話を聞き、自分自身もって理科に情熱を注がなければならないと感じました。研修を通して先生がたに背中を押していただいた感じです。◆旭教大の先生がたの講義は自分の母校とはまた違った内容で、興味深かったです。学ばなければ自身の成長につながらないのでそのきっかけを作っていただきました。◆理科の物理・化学・生物・地学の基礎的な内容だけでなく、理科教育全般の話を知ることができたのが大変有意義でした。◆5 日間の全力投球の授業ありがとうございました。熱意が伝わりました。学校へ戻って生徒に返したいと思いました。

(一部表現を修正)

【技術・家庭科教育講座運営の概要】

- ◎ 講座担当教員 6 名
- ◎ 受講生の課題の把握
 - ・技術と家庭の両分野の内容を学ぶ

◎ 受講生への留意事項・その他

- ・電卓を持参すること
- ・自由に動ける服装で

研修項目	時間数	目的	内容・形態・使用教材・進め方等
【第1日】 ○衣生活教育について	6時間	○オリエンテーション ○衣生活の現代的課題と衣生活教育の指標、教育実践高揚のための基本を学ぶ(一部ワークを含む)	○自己紹介と本研修のガイダンスを行った。 ○衣生活、被服を教授する側として、現代的課題をふまえて教育の指標をどこにおくかを講義した。つぎに着装目的である快適性とファッション性認識の形成をバランス良く定着させる方法について、作業(デザイン画と自己評価シートを使用)を通して感性豊かな衣生活形成にアプローチした。
【第2日】 ○電気について	6時間	○「電気」について理解を深める	○「電気とは何か?」との質問から説き起こして一般的に電気と呼ばれている様々な現象について、その基となる物性について平易に解説した。 3テーマについて実験を行い解説内容の一部を実体験させた。
【第3日】 ○衣生活と環境について	6時間	○洗浄科学とそれに関わる環境科学の関連について理解を深める	○今日の洗浄科学の課題、および水環境評価の考え方について講義した。 ○理論を確認するため、簡単な水質テストの実践方法を実習形式で行った。
【第4日】 ○森林文化について	6時間	○木材と人間との親和性に関する理解を深める	○森林と「木の文化」について次の内容を講義した。 「遺跡から出土した木材」「種々の木材の性質」「木材の性質」
【第5日】 ○家族学習について	6時間	○家族の現状と家庭分野の関連学習内容について理解を深める	○今日の家族の状況(特にアンペイドワークについて)と教科書教材について講義した。 ○ビデオ教材を視聴した。

◎ 受講生の事後の評価

・「徐々に専門的な話を聞くことができ、日々研修を重ねていくことの重要性を感じました。」「技術と家庭が同時に開講されていることも内容の深まりとなり興味深く感じました。」「教科の特性で実験や実習が入り、よりよくわかりました。」「技術と家庭を別コースにしていただければと思いました。」

【音楽教育講座運営の概要】

◎ 講座担当教員 1名

◎ 受講生の課題の把握

- ・音楽教育の重要性を再認識し、実践力を身につけ日常の授業の中で示したい。
- ・音楽教育における専門知識を深めること、教材研究を深化させることで実践に生かしたい。

◎ 受講生への留意事項・その他

- ・自分の学ぶべき課題を明確にしておくこと
- ・木管・金管楽器のいずれかひとつを持参すること
(用意できない場合は事前に申し出ること)

研修項目	時間数	目的	内容・形態・使用教材・進め方等
【第1日】 音楽教育の課題	6時間	新しい教材研究の重要性 吹奏楽指導の実践上の課題 音楽教養の意義	1日目 午前：講義 管楽器奏法の基礎—アムブシュア及びプレスコントロール—理論、楽器学概説 午後：講義 音楽鑑賞教育、バロック～古典派の概説（ハイドンの音楽） 講義 教材研究、リズム遊び、ボディパーカッション及びヴォイスアンサンブル概説
【第2～4日】 課題研究 教材研究	各6時間		2日目 午前：演習 管楽器奏法研究、各自用意の木管・金管楽器個別指導、エチュード使用 午後：講義 音楽鑑賞教育 古典派の概説（モーツァルトの音楽） 演習 教材研究、ボディパーカッション（サンバ）及びヴォイスアンサンブル（野菜の気持）実習 3日目 午前：演習 管楽器奏法研究、木管・金管楽器個別指導、エチュード又は楽曲使用 午後：講義 音楽鑑賞教育 古典派～ロマン派の概説（ベートーヴェンの音楽） 演習 教材研究、ボディパーカッション（スタンピード）及びヴォイスアンサンブル（野菜の気持）実習 4日目 午前：演習 管楽器奏法研究、木管・金管楽器のアンサンブル指導、大学生との二重奏 午後：講義 音楽鑑賞教育 ロマン派の概説（シューマンの音楽） 演習 教材研究、ボディパーカッション及びヴォイスアンサンブルの成果発表
【第5日】 研修のまとめ	6時間	まとめ	5日目 午前：演習 管楽器奏法研究、木管・金管楽器でのエチュード、楽曲、アンサンブルの成果発表、学校現場での管楽器指導法についてのディスカッション 午後：講義 音楽鑑賞教育 国民楽派の概説（サン＝サーンスの音楽）

◎ 受講生の事後の評価

- ・自分のスキルアップにつながる研修であった。
- ・いろいろ体験できるプログラムであったので満足している。
- ・教わる側になってみるのも貴重な体験であった。
- ・管楽器実技、音楽教養鑑賞、ボディパーカッションとどれも充実していて今後に生かすことのできる内容であった。
- 音楽教養鑑賞では、実際の演奏を聴くことで時代やそれぞれの作曲家の特徴を知ることができた。
- ・先生と学生達とのかかわりが多くとても良い雰囲気の講座であった。
- ・実技が主である点は良かったが、普段の授業で役立つ内容（合唱、器楽、和楽器、創作など）も取り入れて欲しい。
- ・このコースはこのまゝ残し、普段の音楽の指導の仕方を学びたい人用にもうひとつ別にコースを用意してあると、よりスムーズに応えられると思う。
- ・5日間かけてじっくり取り組むことができた。
- ・楽器、鑑賞、ボディパーカッションと参加でき、自分で最終日につくりあげていくという内容であったので進んで取り組めた。
- ・もっとじっくり取り組みもう一度大学生になりたい気になった。

【美術教育講座運営の概要】

- ◎ 受講研修教員・映像メディア等デザインコース講座担当教員 3名
- ◎ 受講生の事前アンケートによる課題の把握
 - ・美術教育のねらいと育てる力を明確に理解したい。
 - ・美術教育の役割の再確認と実践の交流を日常の授業の中で示したい。
 - ・美術教育の重要性の啓発と方法のあり方を学び、実践に生かしたい。

◎ 受講生への留意事項・その他

- ・事項の児童生徒作品を持参すること。
- ・自分の学ぶべき課題を明確にしておくこと。
- ・実技研修のできる服装も準備すること。

研修項目	時間数	目的	内容・形態・使用教材・進め方等
[第1日目]	6時間	○ オリエンテーション	◆自己紹介 ・各自自己研修課題の確認 ・小学校における図画工作科の現状・教科の専門性を高めるために ・中・高等学校における美術科の現状 ・芸術教育の現状と今日的課題 [講義] 一斉指導・・・テキスト使用 ◆美術教育の中で「独り立ちできる」人間を育てるために。 ・研修課題，内容，方法等の検討・感性と知性のバランスある人間・教育の普遍的価値と自己実現・美術を学ぶことの意義と役割，・情操，情緒，感受性等について・造形表現の活動で身につける資質等 [演習・教材作成] 一斉指導・個別実技指導・・・プロジェクター，コンピュータ，数種類の紙，着色材料等
○ 美術教育の課題		○ どのような子どもを育てようとしているか ○ 教育の今日的課題 ○ 美術教育の意義 ○ 美術映像デザインの実践上の課題	
[第2～4日目]	9時間		◆美術科の授業の中で視覚映像を指導するポイント ・視覚映像デザインの指導実践，演習と研究協議・教材の開発と制作・映像メディアを活用した表現方法の探求・アニメーション等 ◆美術科の授業の中でコンピュータを活用する際の指導のポイント ・情報デザインの指導実践，演習と研究協議・教材の開発と制作・コンピュータを活用した表現方法の探求・画面操作の方法，プリント・パソコンでのドローイングの研修，パソコン（マック）の基本的操作 ◆各種機材，視覚映像教材，情報システム，情報モラル，著作権等問題 ・関連する各種機械の操作方法など [講義・演習] 一斉指導，教材作成の実際・・・テキスト使用，ケント紙等
○ 教材作成	9時間	○ 演習のまとめ	
[第5日目]	6時間		◆発表・交流・評価 ・自己の研修課題の成果・教科書，学習指導要領，指導書等の指導内容・美術科にかかわる教師の基礎的な資質と能力の確認・児童生徒の表現意欲の高め方，・題材開発と教材研究の重要性など ◆ [研究協議] ・一人一人の研修の評価と発表 ・成果としてあげられること，課題として残されたことなど ・成長しつづける教員として，今後の抱負，進むべき方向性などの発表
○ 研修のまとめ		○ 本研修のまとめ	

◎ 受講生の事後の評価

・人間の成長の課題や芸術教育の重要性、教材研究のあり方、実技指導など、幅広く、奥深い内容で充実した5日間だった。・今までの10年間を振り返り、これからの目標を考えるきっかけとなった研修であった。・学生に戻って学びなおした感じだ。・今までの自分にはない内容の研修内容だった。・美術教育の原点に戻った研修だった。・映像の鑑賞やパソコンでの研修など内容が多岐にわたり、盛りだくさんな研修で充実した。・美術教育の重要性を改めて認識し美術教師としての誇りを持ち、自信を持って仕事に向かう意欲が湧いた。・楽しく意欲的に研修できた。・自分の苦手な分野を強化した研修だった。・視覚映像など新しい指導内容に応じた研修内容だった。など

【道徳教育講座運営の概要】

- ◎ 講座担当教員 2 名
社会学・社会哲学担当1名、教育学・教育方法学担当1名
- ◎ 受講生の課題の把握
 - ・道徳授業開発について学びたい。
 - ・教育課程における道徳の具体的運用について学びたい。

◎ 受講生への留意事項・その他

道徳の指導案作成の資料にするため、各自、過去に作成した道徳もしくはそれに準じる他教科の指導案、あるいは授業の素材となるものを用意し、持参すること。

研修項目	時間数	目的	内容・形態・使用教材・進め方等
<p>【第1～2日】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○問題意識の交流 ○道徳の授業づくり 	12時間	<ul style="list-style-type: none"> ○オリエンテーション ○道徳指導案の一般的構成 ○道徳の指導案作成 ○道徳のモデル教材の紹介 ○模擬授業の発表 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介・課題意識の交流とディスカッション。 ・道徳的实践力としての目標設定、教具・教育内容・教材の構成法等の講義。 ・受講生ごとに持参した指導案等を基礎に、教材を選定し指導案を作成する。 ・優れた道徳授業を追試し、模擬授業で再現の後、ディスカッションする。 ・各受講者が構想した授業を指導案をもとに模擬授業で発表し、検討を行う。
<p>【第3～5日】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○道徳の理論的基礎 	18時間	<ul style="list-style-type: none"> ○道徳の価値内容項目を、諸学問の成果と、現実的課題から読み解く。 	<p>下記の主題での資料の読みあわせ（一部は講師のレクチャー）とディスカッション</p> <ol style="list-style-type: none"> ①「ボランティア」をめぐる（自発性と強制制との狭間での教育的課題） ②「人権」をめぐる（「人間の尊厳」と「自己決定」） ③「平等」をめぐる（「同じ取り扱い」と「異なった取り扱い」／affirmative action） ④「相違への権利」と「エスニシティ」について ④「能力の共同性」について ⑤「共生概念」展開の現段階（共生と進化） ⑥「環境的正義」と「サステナビリティ」 ⑦「開発・発展」概念の展開（基底としての人間「発達」） ⑧「身体の所有？」について ⑨「Quality of Life」について <ul style="list-style-type: none"> ○研修のまとめ

◎ 受講生の事後の評価

・子どもや教材に向き合うときの参考になった。・指導案を作ってそれをもとに検討し合うこと、平等や生命などについて考えることは、授業や教材の観をもつという大切な部分だった。・10年研の中で一番ためになる講座だった。・これまで道徳の研修は積極的に受けてこなかったが、今回はさまざまな視点から道徳を考えることができた。・配布された資料が、身近な問題をとらえつつ議論を深めることができる内容だった。・楽しく前向きに取り組むことができた。教師として人間としても幅が広がった。・普段何気なく見聞きしている言葉について深く考える機会をいただいた。・道徳の授業がしたくなった。

【理科・総合的な学習の時間 指導専門講座「雪の教育活用を探る」運営の概要】

◎ 講座担当教員 1名

◎ 受講生への留意事項・その他

・Webページ「北海道雪たんけん館」 (<http://yukipro.sap.hokkyodai.ac.jp>) を時間のある時に見て、授業でどう使うか考えてみて下さい。

・外や低温室での実習がありますので、暖かい服装、長靴、作業用手袋（軍手）などを準備下さい。

研修項目	時間数	目的	内容・形態・使用教材・進め方等
<p>【第1日目】</p> <p>○実践事例の紹介</p>	6 時間	○雪の学習実践の意義	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション～自己紹介 ・北海道雪プロジェクト会員である札幌市内小学校教諭を外部講師として招き、雪を使った実践紹介、雪でどんな活動ができるか、カリキュラム作りは可能かに関するワークショップ
<p>【第2日目】</p> <p>○Web ページ「北海道雪たんけん館の内容」</p> <p>○降雪の科学と観察法</p>	9 時間	<p>○Web ページ紹介</p> <p>○雲の中での降雪粒子成長の科学と観察法の理解</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・雪から広がるさまざま学び、北海道雪プロジェクトの活動や Web ページ「北海道雪たんけん館」の紹介 ・雲の生成、冬型の気圧配置、大気中で雪の結晶ができるまでに関する講義 ・雲を作る実験、過冷却の実験、降ってくる雪の観察法実習
<p>【第3日目】</p> <p>○降雪粒子の特徴と成長条件</p>	6 時間	○「雪は天から送られた手紙」とは？	<ul style="list-style-type: none"> ・雪の結晶の分類、人工雪などに関する講義 ・気象衛星画像の見方に関する演習、雪の結晶の赤ん坊を作る実験、鉛直過冷却雲風洞による人工雪結晶成長実験
<p>【第4日目】</p> <p>○積雪の科学と観察法</p> <p>○まとめ</p>	9 時間	<p>○積もっている雪の科学と観察法の理解</p> <p>○研修を通して</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・積雪の変態、雪温分布に関する講義 ・積もっている雪の観察法実習 ・雪の実践に関する討論
<p>【第5日目】</p> <p>○「雪の学習」研究会参加</p>	6 時間	○公開授業、提案授業を通して、雪の学習実践に関する理解を深化	<ul style="list-style-type: none"> ・本学と附属札幌小が地域の教員と協力して行っている研究会「雪の学習研究会」に参加し、実践の理解を深める。この研究会は「雪の学習」普及を図るもので、実践に資する情報を提供することを意図している。

◎ 受講生の事後の評価

「身近にありながら良く知らなかった「雪」について、詳しく学ぶことができた。視聴覚機器を使ったり、実際に体験することで理解しやすかった。…今後の授業に生かせる内容であった」、 「大学内の研修ばかりでなく、体験的な活動が多く、子どもの気持ちになりながら、楽しんで研修できました。」 等

◆ 生徒指導専門講座（考察）

1 事前アンケートで最も身につけたいこととして出された具体的項目

区 分	主 な 意 見	詳 細
学習指導力	○授業の構想力・授業技術	・生徒の興味・関心を引き出す授業 ・子どもに思考させる授業 ・日本語の語学力の乏しい子どもへの対応
生徒指導力	○一人一人の子どもを理解する能力 ○子どもへの論理的説得能力	・落ち着かない子，軽度発達障害の子どもへの対応・支援 ・子どもたちに分かる言葉，説明 ・自立心の低い子どもへの対応
教育相談力	○子どもとのコミュニケーション能力 ○一人一人の子どもを受容する力 ○自己の感情のコントロール	・自己の感情のみならず，他人の感情もコントロールさせる手立て（心の落ち着きの面で）
学級指導力	○学級という集団を向上させる能力	・学級リーダーの育成 ・人との関わり方の充実 ・集団として自治の力を高める方法 ・人間関係活性化の手段
地域教育連携力	○保護者との連携や情報発信能力，情報公開，透明性	・保護者との関係改善 ・保護者，子どもとも常識が通用しない場合の対応 ・親からのクレーム
協働遂行力	○教師間の関係調整能力，意見交換，意志の疎通ができる能力	・新卒者や若手への助言
臨床的実践力	○特別支援教育についての知識や理解 ○社会事象，周囲の世界への興味の深さと子どもへの指導	・子ども・保護者はどのような教師についてくるか ・自己・知識・能力を高めたい。 ・人間性の確立
学校推進力	○校内研修など様々な研修への参加意欲と学校の活性化への努力	・学校をマネジメントする力など ・中堅教員としての学級運営などの進め方等

2 事前アンケートの要望を受けて作成したプログラムの例

次項のとおり。

【生徒指導専門講座運営の概要】

◎ 講座担当教員 1 名

◎ 受講生の課題の把握

◎ 受講生への留意事項・その他

- ・ 普段会いたくてもなかなか会えない人
- ・ ゆっくり時間をとって話してみたい人など
- ・ 研修期間の2日目にインタビュー可能な人を事前に探しておくこと

研修項目	時間数	目的	内容・形態・使用教材・進め方等
【第1日】 イントロダクション 現状へのアセスメント	6時間	○ グループ分けとアイスブレイク ○ 趣旨の説明 ○ 現在の状況へのアセスメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ “命の水” で乾杯、ジェスチャーゲーム、グループでの自己紹介 ・ 10年の経過 サポート・原点としての“会いたい人” ・ NHKスペシャル「学校は何ですか？」を見る（45分）現在の学校と同じ点・違う点を挙げてみる ・ 教職についてからの10年を線で書く（画用紙にクレヨン・ペン）。
【第2日】 話す・聴くワークとインタビュー	6時間	○ 話す・聴くワーク ○ インタビューへ向けての注意事項 ○ 外でのインタビュー	<ul style="list-style-type: none"> ・ “WHY BECAUSE” ゲーム ・ 黙って聴く・合いの手を入れて聴く ・ 連絡先の把握・報告する内容 ・ 話を聴くワーク
【第3日】 インタビューの振り返り これからの10年とまとめ	6時間	○ インタビューの振り返り 分かち合い ○ 教員の忙しさの背景 ○ 助けを求める・相談をするワーク ○ これからの10年	<ul style="list-style-type: none"> ・ 感じたこと 考えたこと。代表者の発表 ・ この10年の教育改革の解説 ・ 親からの無理難題要求について考える。保護者を仮定したロールプレイ ・ なぜ相談することには抵抗があるのか ・ 自分のソーシャルサポートの確認 相談をしてみるワーク ・ 10年後の自分への手紙 ・ 感想とまとめ

◎ 受講生の事後の評価

- ・ どのワークもとても興味のある内容でした。他の先生方の話を聴いたり、ビデオや文献の内容も自分の経験と重なる部分が多く、充実していました。
- ・ 普段ゆっくり話す機会がない人と話せてよかった。忙しさの中から自分を取り戻すには、まわりの人とよく話してみることが大切だと思いました。

C 開発の視点3＝校内研修プログラムの開発＝

1 開発の目的

学校における校内研究・研修（授業研究・教材研究・授業設計等）は、それぞれの学校の校長をはじめとした構成員の特性や、地域・風土・伝統などを尊重して行っている。

北海道の小中学校においては、**半数以上の学校がへき地・小規模、複式・複数教科担当であり、また広域のため、日常的に研修に参加することが困難であるという学校の特性があり、校外研修を含む10年経験者研修は、所属学校における校内研究・研修との関連性が極めて強い。**

このため、教員研修モデルカリキュラムの作成にあたっては、10年経験者研修受講者の力量形成、資質・能力の向上を図るとともに、**所属学校の教育活動の活性化にも寄与する校内研修プログラムに配慮し、校外研修と校内研修プログラムと連携することを目指した。**

2 開発の方法

【STEP1】

小中学校で行われている「校内研修」に関する計画・実施状況等を把握するとともに、10年経験者研修と連携した校内研修の優れた実践事例を収集し、当該学校の活性化に繋がる校内研修（案）を開発した。

【STEP2】

開発した「校内研修プログラム」に基づき、校内研修計画を立案・実施し、評価を行い開発の視点を明らかにした。

3 開発の成果

北海道内の約20の地域の市町村・学校を直接訪問し、10年経験者研修と校内研修との関わりについて調査したところ、次の成果があがったことが確認された。

- 教職10年を迎えた教員のほとんどは、10年経験者研修を「本物の教師になろう」という意志を持って受講している。
- 10年経験者研修に刺激を受け、本学大学院に進学した教員がいる。
- 研修を終えた教師が、翌年、校内研究を中心となってリードしている事例がある。
- 10年経験者研修受講生を中心に北海道教育委員会の実践論文の公募に応じた学校があった。
- 校内研修の活性化に向けて、指導主事に訪問を要請し、率先して授業研究を行うなど、校内研修の活性化に結びつけている事例がある。
- 大学の専門講座の内容、アンケート等と自己の研修課題を管理職に報告し、校内に還流している学校の事例がある。

4 学校における実践事例

－A校の例－

重点研修内容

- 生徒一人一人に応じた指導内容を準備し、その内容を達成することができる指導方法を研修し、実践力を高める。
- 特別な支援を必要とする生徒の信条を理解し、適切な指導を行うことができるよう研修を行う。

■ 教科指導等研修成果の還流

夏季休業期間中に北海道教育大学で開設された教科指導専門研修を受講した。
その成果を学年部会（特殊学級部会）で還流及び報告する機会を設けた。

○ 教科指導部会での成果の還流

特殊学級部会において、休業中に受講した教科指導等研修について報告を行った。

- ① 応用行動分析学に基づいた「支援ツール」について
- ② 事例研究
- ③ 分析の手法と児童生徒に応じた支援や対応について

■ 授業実践研修

研修の成果を発表するための研究授業を行い、全体研修として位置付けた。

また、外部の評価及び指導を受けるために教育局義務教育指導班の指導主事へ訪問を要請した。

（校内研修の日程）

4校時 全学級授業公開

5校時 道徳授業公開

14：40～15：40 学年部会，授業反省

15：45～16：45 全体研修

- ・ 授業者から
- ・ 学年部会協議内容報告
- ・ 全体交流，意見交換
- ・ 教頭より
- ・ 指導主事より助言
- ・ 校長より

Ⅲ 大学・教育委員会連携による研修

1 北海道教育委員会との連携

(1) 北海道教育委員会との協力体制

教員研修モデルカリキュラムの基礎となる10年経験者研修の実施にあたって、北海道教育委員会との連携により協力体制を構築している。

この連携は、平成13年3月22日に締結した相互協力協定に基づくものであり、北海道教育の発展を図るため、連携協力することを確認していること、また、本学が北海道内の教員の資質向上を目的とする地域貢献特別支援事業に取り組み、実施していること、さらには本学の将来構想基本方針や、国立大学法人としての中期目標・計画の中で、現職教員の研修を受け入れることを位置づけていること等による。

以上のことにより、**本学及び北海道教育委員会の両者が委員となる10年経験者研修専門講座運営委員会を組織し、連携を維持・推進し、さらに研修内容の充実を図るための緊密な関係を維持**している。

さらに、両者の関係を深化させるとともに、「**成長しつづける教師**」を育成するため、10年経験者研修専門講座の実践に基づく教員研修モデルカリキュラムの開発に着手している。

(2) 10年経験者研修専門講座の実施体制

本学では、北海道教育委員会との協議の結果、**委託契約書を取り交わし、10年経験者研修専門講座を受託**している。(参考資料参照)

(3) 10年経験者研修の実施に関する双方のメリット

本学及び道教委は、「**北海道の教育に責任を持つ機関**」であることから、現職教員の資質能力の向上についても、共通の目的として取り組んでおり、双方にとって、次のようなメリットが考えられる。

○ 本学の教員のメリット

- ① 10年経験者研修を通して現職の教員と交流することで、学校現場の抱える様々な問題点や課題等を理解することになり、その結果、教育現場に繋がる実践的な研究を推進し、学生指導に有益な情報を得ることができる。
- ② 教員となって活躍している本学の卒業生に対する大学教育の指導責任が自覚され、その成果や課題を把握することができる。
- ③ 中期目標・計画に掲げる、北海道の教育に責任を持つ機関としての責務を達成することができる。

○ 道教委のメリット

- ① 現職教員が、少人数、ゼミ方式の研修により、大学院レベルの専門的な内容を教授されること。
- ② 教科指導・生徒指導の本質や今日的課題を踏まえた指導を受けられること。
- ③ 受講者同士の相互交流等により、学校教育の質の向上が図られること。

- ④ 大学・講座担当教員と受講者の結びつきの中で継続的な交流が図ることができること。

(4) 受講生の状況，所属校の状況，他県の状況の考察

【受講生等の状況】

- 研修後，本学大学院に入学した者がいる。
- 研修を終えた教員が校内研修の中心となってリードしている。
- 受講生が中心となり，北海道教育委員会の実践論文の公募へ応募するなど校内研修の機運が高まる。
- 校内研修の授業者として指導主事の訪問を要請し，校内研修の活性化に結びつけている。

【受講生が所属している当該校の反応】

- 大学における専門講座は好評であり，学校側でも，10年経験者研修専門講座で学んだ教師が成果を校内研修に還元する体制ができつつある。
- なお，小規模・へき地校においては，研修に1名の教員を出すと学校運営が困難になる事情があり，また，少人数のために校内研修の体制を作ることが難しい学校もあるとの指摘がある。

【他県の状況】

10年経験者研修と教育委員会との連携について，他県での状況を調査したが，本道のように全面的な連携体制を築いているところはない。それぞれが，講座内容の広報や持ち方について教育委員会と連携し，実施している状況である。

なお，共通していることは平成21年度に本格導入される教員免許更新制との兼ね合いに苦慮していることである。

3 今後に向けて

これまでの実施結果を考察し，受講者個々のニーズに基づく研修運営のあり方や専門講座内容の充実など，北海道教育委員会，大学とも見直すべき点を明確にし，北海道の現職教員の一層の指導力の向上が図られるように連携を強化していきたい。

さらに，教員免許更新制の導入が予定されている平成21年度に向け，北海道の教員養成に責任を持つ唯一の機関である本学が，これまで，教員研修モデルカリキュラム開発等，10年経験者研修専門講座の運営で培ったノウハウを十分に生かした運営を検討するとともに，北海道教育委員会とのより緊密な連携体制を構築することが必須であるといえる。

IV その他

[キーワード] 成長し続ける教師，北海道教育委員会との緊密な連携，自己評価，事後評価，外部評価，校内研修，自己成長力を高めるチェックリスト

[人数規模] 900名（北海道内全域の10年経験者研修受講生）

[研修日数] 教科指導専門講座5日間，教科指導専門講座（3日間）（北海道教育委員会が実施する約40日間の研修のうちの校外研修として位置付けられている。）

【問い合わせ】

国立大学法人 北海道教育大学
総務部総務課広報・地域連携グループ
〒002-8501
北海道札幌市北区あいの里5-3-1
TEL 011-778-0210